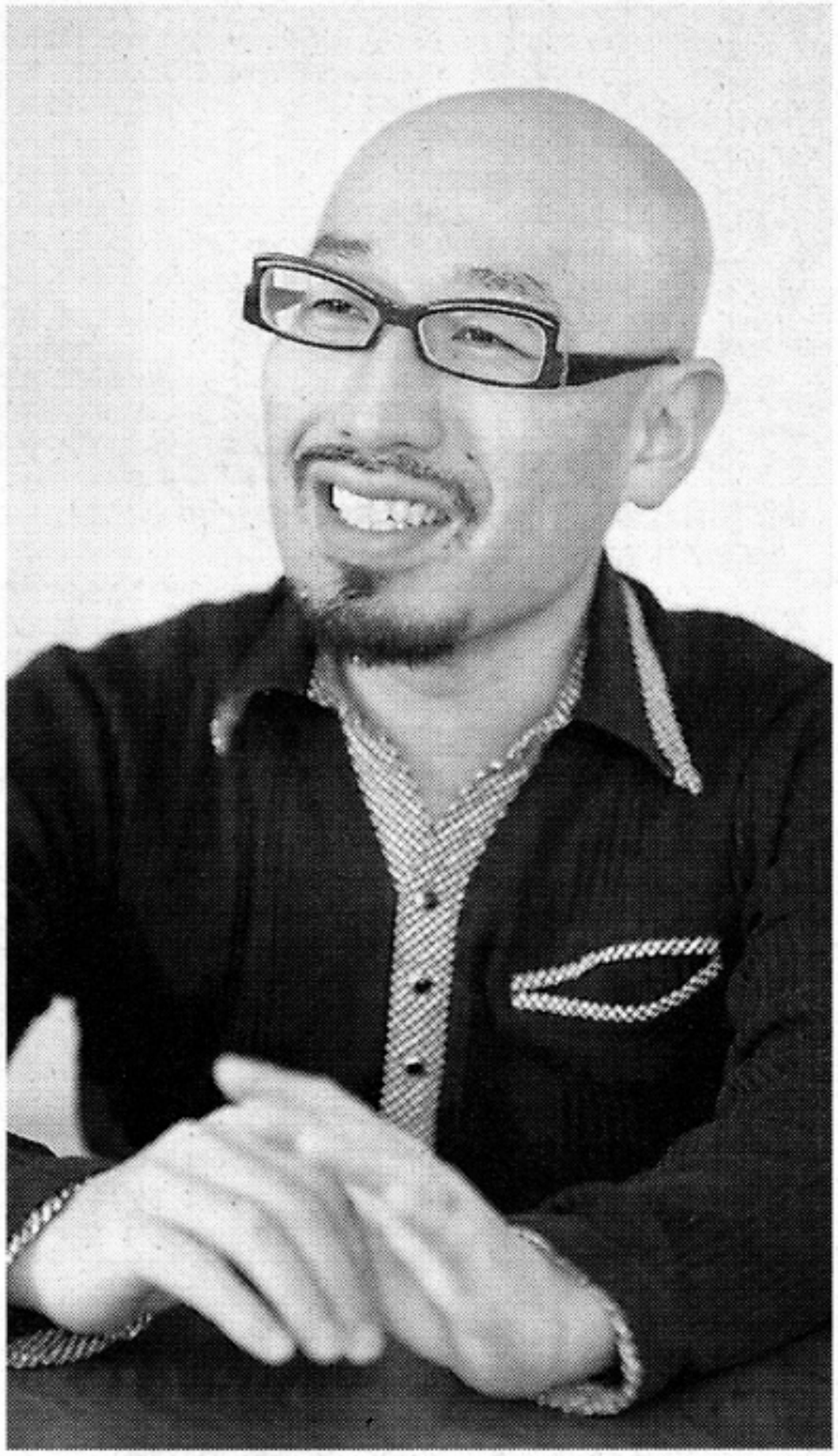
■恋ちゃんはじめての看取り

# 家族らでささえる幸せな死を

## 著者に会いたい

國森 康弘さん(37)



小学5年生の恋ちゃんはある朝、一緒に暮らす曽祖母竹子さんの死を知らされる。深夜、眠るように逝ったのだ。土気色の手にさわる。しわだらけの足をなでる。〈ふれるとすごくつめたいんだけど……。おおばあちゃんの顔、ほんとにやさしい〉

遺品には尋常小学校の卒業写真。〈わたしもいつか、おおばあちゃんみたいにやさしいおばあちゃんになれるかな〉。そっとキスした。

写真絵本「いのちつぐ『みとりびと』」全4巻の初巻だ。滋賀県の農村で家族や隣近所が協力して高齢者の終末期をささえる情景を写した。在宅医療に取りくむ医師花戸貴司さんに同行し、家族が死をみとる場面にも自然に立ちあう。幸せな死をとらえた写真には人柄がにじむ。

2003年、イラク戦争を機に神戸新聞の記者をやめ、フォトジャーナリストに。生活者の姿が撮りたくて中東やアフリカなどの紛争地、貧困地帯を回った。父に抱かれ、うつろに天を仰ぐ栄養失調の子。自爆攻撃に巻きこまれ、焼けこげる人。

「天寿をまっとうできない、悲しい死ばかり見てきました。やり切れなさがつのったとき、温かなみとりによる幸せな死に出あえました」

第2巻『月になったナミばあちゃん』では、ひとり暮らしのおばあちゃんが望みどおりに自宅でみとられる瞬間に立ちあった。死者が、蓄えてきた豊かな生命力を生者に渡す儀式のようだった。みとりとは、命のバトンリレーなんだと思った。

「恋ちゃんのように身近な人の命を大切に受けとめて初めて、知らない人の命も大事にできます。それは戦争をなくす力になるはずです」

(農山漁村文化協会・1890円)

文・白石明彦
写真・伊藤菜々子